

不便益

校長 荻野 秀和

「不便益」(ふべんえき)。聞いたことがあるという方は少ないと思います。不便益は京都大学の川上浩司先生が提唱しているものです。川上先生は「不便益システム研究所」を立ち上げ生活の中で不便で良かったことを研究し、不便の意味を問いかけています。例えば、富士山に頂上まで行けるエスカレーターを作ったら便利になるのでしょうか。そうすると便利ではありますが、登山の意味がなくなります。登山は自分の足で歩いて登るから意味があるのです。キャンプもそうです。キャンプはわざわざ山に行きます。便利な世界から不便な世界へ行き、その中で生活をすると日常生活にはない世界が待っています。川上先生は、便利な世の中だからこそ、不便がもつ益に視点をあて、研究しているのです。

私の前任校は、佐渡ヶ島の北端、鷲崎集落にある内海府中学校でした。フェリーが通う両津港から約30kmあり、車で約50分かかります。はじめの20kmはセンターラインのある道ですが、残りの10kmは車がすれ違うのがやっとの細い道です。トラックやバスとのすれ違いにはどちらかがバックをして道幅の広い場所までさがらなければいけません。乗用車同士でも、道を譲り合う箇所もたくさんあります。とても不便です。

しかし、川村先生の言う不便益を知ってからは、細い道に対する考え方が大きく変わりました。バックして道を譲ると、相手の車の運転手は、会釈をしたり手をあげたりしてくれます。こちら「どういたしまして」の意味を込め、手を上げます。時には大きなダンプカーの強面の運転手の笑顔も見ることができます。何気ない光景ですが、鷲崎集落に住む方々とのちょっとした触れ合いになります。この触れ合いが生活の中で大いに役立ちました。集落の会議に出席するときは、コミュニケーションがとりやすくなったり、話し合いがスムーズに進んだりしました。このように身の周りの不便が役立っていることがたくさんあるのではないのでしょうか。「便利なことはいいこと」だという現代の考えに、一石を投じる不便益でした。